（試験研究課題年次別解説集様式 3-2 号：継続課題用）

サバ類の資源生態研究

（水産資源調査・評価推進委託事業）

（予算区分　受託　研究期間　1995 年度～）

担当：水産・海洋技術研究所　資源海洋科　冨山皓介

【研究の背景とねらい】

国連海洋法条約批准に伴い、我が国周辺で漁獲対象となる広域回遊魚については、漁業資源を持続的に活用することが求められています。そのため、関係機関が連携して資源動向を把握するために必要なデータを収集し、生物学的許容漁獲量の算定を行っています。マサバ、ゴマサバについても水揚量調査、体長測定、年齢査定、標本船調査等を定期的に実施し、（国研）水産研究・教育機構と連携して資源評価と長期漁況予測を行っています。

【これまでに得られた成果】

（2019 年度の成果）

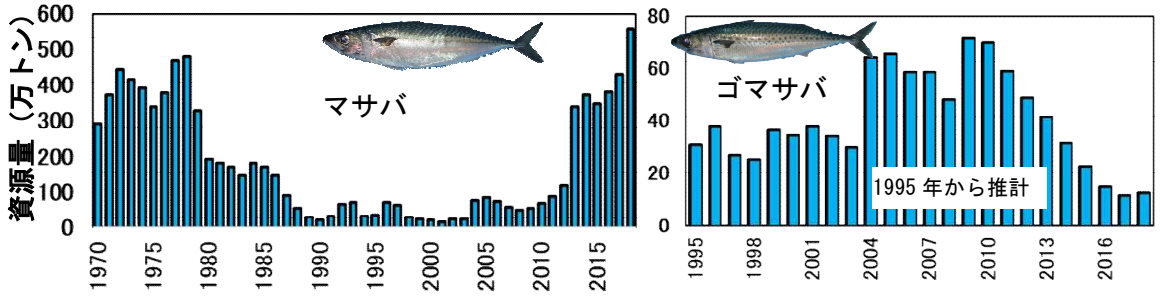
・マサバ太平洋系群の資源量は 1970 年代には 400 万トン前後で推移していましたが、1980 年代から減少し、2001 年には 15 万トンまで減少しました。その後 2005 年頃から増加傾向に転じ、2018 年の資源量は 560 万トンと推定されました。

・ゴマサバ太平洋系群の資源量は 1995 年から 2003 年頃まで 30 万トン前後で推移していましたが、2004 年以降増加し、2009 年には 70 万トン以上の高い水準となりました。しかし、2011 年以降減少傾向となり、2018 年の資源量は 12 万トンと推定されました。

・今回の漁業法の改正に伴い、サバ類は MSY を基準とした新しい目標親魚量（マサバは 45 万トンから 154 万トン、ゴマサバは 3.8 万トンから 15.8 万トン）と、新しい資源評価（「高位、中位、低位」の 3 区分から「適正、警戒、要回復、禁漁」の 4 区分）に移行しました。

・2018 年のマサバ親魚量は 119 万トンで目標を下回り「警戒」、ゴマサバ親魚量は 5.3 万トンで目標を下回り「警戒」と評価されました。

・水産技術研究所では、伊豆諸島海域におけるサバ類の来遊量や漁場等の長期漁況予測を 2019 年 7 月と 12 月に行い、県内関係者へ情報提供しました。



サバ類資源量推移

【期待される効果】

・収集した各種データから資源動向を把握することで、資源管理が適切に行われ、資源の持続的利用が図られます。

・漁況予測を関係者へ提供することで、漁業者の経営の安定が図られます。

【今後の計画】

・減少傾向にあるゴマサバを主に、サバ類の資源動向、漁況を把握していきます。

・成長・成熟に遅れがみられるマサバについて、卵巣組織切片観察等から成熟・産卵状況を把握していきます。

（作成　2020 年 4 月）